「平成の正殿」と「令和の正殿」の違いについて
―総括的な所見―

高良倉吉

Ⅰ 「平成の正殿」の要点

★根拠資料

＊「百浦添普請付御絵図并御材木寸法記」（1768 年、略称「寸法記」）

＊「百浦添御普請絵図帳」（1846 年）他 3 冊の尚家文書

＊「国宝沖縄神社拝殿図」（昭和初期）他の解体修理記録

＊古写真や発掘資料、研究成果等

★結果として、1992 年に甦った正殿（「平成の復元」）は琉球王国時代の姿に近づいた。

★一定レベルの防災・防火対策を講じたが、結果としては不十分だった。

Ⅱ 「令和の正殿」に向き合う際の課題と前提

★２度と焼失しないための課題に取り組む。⇒防災・防火対策の徹底化

★新たな資料、新たな知見によるバージョンアップを。

＊琉球漆芸技術史研究の進展

＊祭祀・儀礼空間としての首里城研究の進展

＊遺物や残欠等の解析の進展

＊首里王府の拠点としての首里城研究の進展など

★宿題としての「久志間切弁柄」の解明と応用。

＊「尚家文書」1846 年重修記録に登場、正殿の色調を決める根拠

Ⅲ 検討、分析作業、連携の体制

★「首里城復元に向けた技術検討委員会」の場での総括的検討。

★４つのワーキンググループ会議における各論的検討。

①木材・瓦類、②防災、③彩色・彫刻、④北殿・南殿等

★２つの作業チーム会議における詳細的検討。

①彩色・彫刻、②塗装

★国と県の連携による再建事業の推進体制が稼働。

むすび：首里城再建に対する期待に向き合うために

「多くの人びとの思い」＋「事業推進者の責務」＋「復興過程の共有」